

◆ 実戦問題 36 ◆

この阿闍梨は、冷泉院にも親しく(1)さぶらひて、*御経など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに(2)参りて、例の、*さるべき文など御覧じて、問はせ給ふこともあるついでに、「*八の宮の、いとかしこく、*内教の御才悟り深くものし給ひけるかな。*心深く思ひすまし給へるほど、*まことの聖の掟になむ見え給ふ」と聞こゆ。「いまだかたちは変へ給はずや。(2)*俗聖とか、この若き人々の付けたんなる、あはれることなり」などのたまはす。

*宰相の中将も、御前にさぶらひ給ひて、我こそ、世の中をはいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど、人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れと、人知れず思ひつつ、俗ながら聖になり給ふ心の掟やいかにと、耳とどめて聞き給ふ。「出家のころさしはもとよりのし給へるを、はかなきことに(3)*思ひとどほり、今となりては*心苦しき女子どもの御上をえ思ひ捨てぬとむ、嘆き給ふ」と奏す。

● 国学院大(文) 出題文

【出典】

『源氏物語』は十一世紀初めに成立した。作者は紫式部。光源氏を主人公とした長編であるが、源氏が死んだあとは彼の子どもである「薫」を軸に話が進む。そこを「宇治十帖」と呼ぶが、問題文はその最初の巻のお話である。

*阿闍梨 八の宮と親交のある、徳の高い僧。京のはずれの宇治山に住んでいた。
*冷泉院 故桐霊院の第十皇子。
*御経 仏教の経典。
*さるべき文 しかるべき経典。この「文」は経典を指す。
*内教 仏教徒が仏教を指して言う言葉。
*心深く思ひすまし給へる 心深く思ひすまし給へるほ

設問

問1 傍線(1)を、謙譲語に注意しながら現代語訳せよ。

問2 傍線(2)～(3)の主語として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ①阿闍梨 ②冷泉院 ③八の宮 ④宰相の中将

問3 傍線(4)「奏す」について説明した次の文の空欄にあてはまる語をそれぞれ記せ。

「奏す」は「言ふ」の①語で、必ず②に対する敬意を表す絶対敬語である。ここでは③が④に対して(申し上げる)のである。

問4 傍線(2)とあるが、八の宮が「俗聖」と呼ばれているのはなぜか。本文に即して説明せよ。

問5 傍線(3)について、

(i) どのようなことを言っているのか。最も適当なものを、次の中から一つ選べ。

- ①阿闍梨が八の宮の現状を伝えるのをためらっていること。
②阿闍梨がお経を冷泉院に教えるのをためらっていること。
③八の宮がすぐさま出家するのをためらっていること。
④八の宮が仏道修行を中断するのをためらっていること。

(ii) このような状態である理由を、具体的に説明せよ。

- 問6 宰相の中将の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。
①八の宮がいささかうやましい。
②八の宮がとても気の毒だ。
③阿闍梨が何となく魅力的だ。
④阿闍梨は言いようもなく軽率だ。

単語チェック

- ☑かしこし 形ク
☑すさまじ 形シク
☑行ひ 名
☑口惜し 形シク
☑はかなし 形ク

ど 心から深く仏道に専念していらつしやる様子。
*まことの聖の掟 本当の聖の心構え。
*俗聖 俗人の姿で仏道の修行をする者。
*宰相の中将 薫を指す。
*思ひとどほり 心が鈍って躊躇して。
*心苦しき女子どもの御上 (八の宮の) おいたわしい(二人の) 姫君たちの御身の上。
八の宮は、妻の北の方を早くに亡くし、二人の姫君を養育していた。